



令和3年6月4日

各位

一般社団法人 日本循環器学会

With コロナ時代における日本の若手・女性循環器医師の現状について

コロナ禍において医療の在り方が大きく変化したが、若手・女性循環器医師にも多大な影響がでている。本調査では、客観的データに基づいてコロナ禍における若手・女性医師の問題整理し、感染のリスクに晒されながら、不安定な雇用、不十分な循環器診療トレーニングや研究が行えないことに対する不安、メンタルヘルスの悪化などの問題を抱えている点を整理した。一方で、パンデミックによって遠隔による学会参加が可能になるなど従来では不可能であった働き方の在り方も模索できるようになった。依然として解決しない女性医師特有の問題の総論をまとめながら、その解決の可能性について提示した。

コロナ禍による若手・女性循環器医師への悪影響

1. COVID-19 感染リスク

若手循環器医師は COVID-19 診療の最前線で診療することがあり、自身の感染リスクだけでなく、自分の家族へ感染リスク、波及する不安、自身と家族が医療従事者として社会的差別を受ける可能性のあることに対しての不安を抱いている。

2. 不安定な雇用

日本医師会女性医師バンクのアンケート(2021年3月)によると、女性医師902人の7%がコロナ禍の影響で離職・退職させられたと回答し、その18%が現在休業中であり、多くの女性医師が解雇への不安を表明した。緊急事態宣言によって保育、学校が休校となり、主に女性医師が家事育児をしなければならず、離職、もしくはキャリアを中断した例、経営難となった病院によって解雇された例、給料減額などによって自ら離職した例もある。

3. 不十分な循環器診療トレーニング

COVID-19 時代における、循環器診療の縮小化、患者の受診控え、COVID-19 診療への循環器医師派遣などで、医学生や若手循環器医師が十分なトレーニング経験を積むことが困難になってきた。専門医試験の中止、学会延期により、モチベーションの維持が困難となり、充実した海外留学の道も絶たれつつある。

4. 若手・女性医師のメンタルヘルス

COVID-19 流行以前から若手医師、特に女性医師に抑うつ傾向、高い自殺率が指摘されていたが、パンデミック以降、拍車がかかっている。国内や海外での調査でも、COVID-19 流行下では、「女性」が重度抑うつの危険因子となっている。

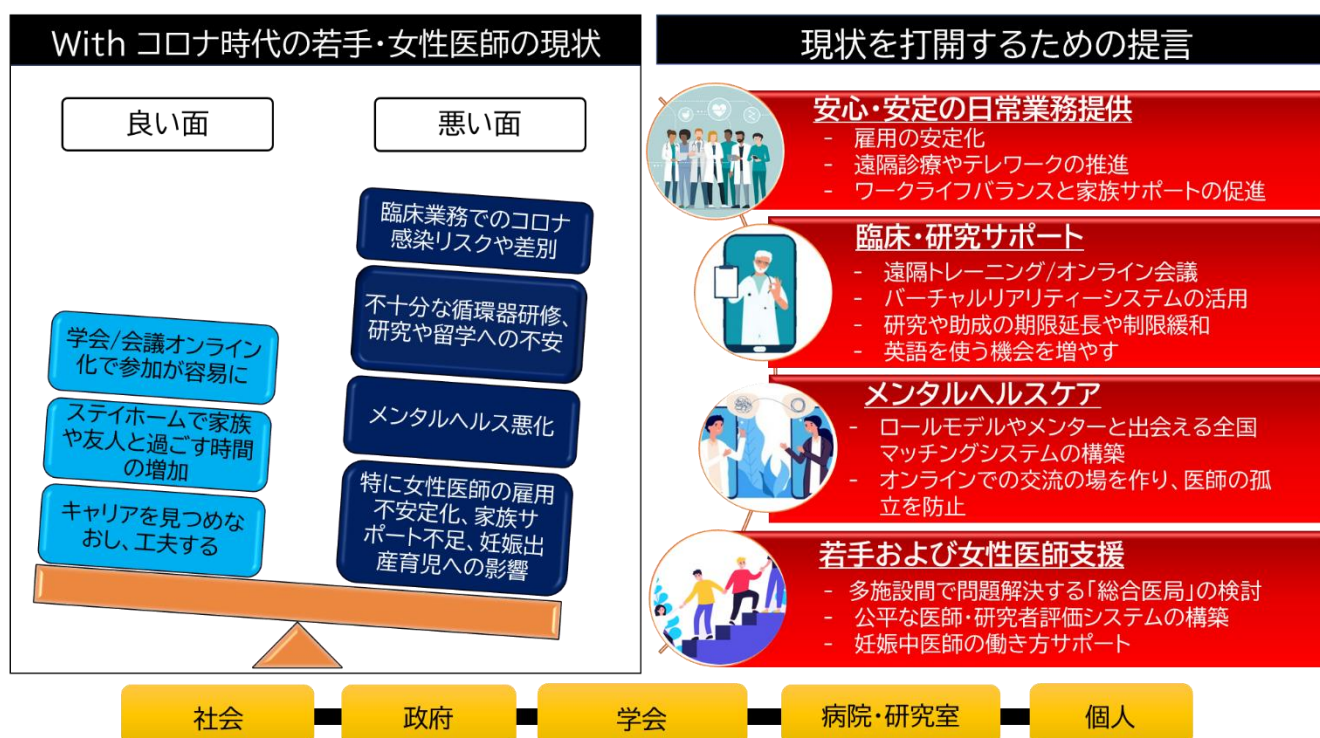
5. 従来からの女性医師の未解決問題、妊娠医師の COVID-19 感染防御

女性医師は、男性医師に比べ、常勤率、意思決定部門への参画率、論文発表率、受賞率、

研究助成獲得率、平均給与のすべてが低く、家事育児の多くを担っているが、コロナ禍でその傾向が更に増悪したと報告されている。また、妊娠医師の感染重症化リスクを懸念した各国が指針を出している中、日本では努力目標にとどまっている。

コロナ禍による若手・女性循環器医師への良い影響

1. 学会がオンライン開催のために参加が容易になり、不要な会議・回診が省略された。
2. 受診患者減少などで時間のゆとりができた医師もいる。
3. キャリアを見直し、困難な時代を工夫して解決しようという空気が生まれた。



問題解決案

1. 社会、政府、学会、病院が若手・女性医師(特に妊娠中)の働き方を強力サポートする。
2. IT やバーチャルリアリティなどを用いた研修トレーニングを開発、英語を用いる機会を増やす。
3. 広くロールモデルを検索できるマッチングシステムやオンラインでの交流の場を作り、医師の孤立を防ぐ。
4. 単施設で解決できないリソースを確保するために「総合医局」という概念の検討や、公平な医師・研究者の評価システムを構築し、年齢や性別に関係なく活躍できる社会を作る。

最近の日本循環器学会でのダイバーシティへの取り組み

1. 若手・女性医師へ向けて「初めての学会座長の手引き」を作成
2. 第85回日本循環器学会学術集会(会長：斎藤能彦)で女性座長25%を達成

発表論文

タイトル The Vulnerable Cardiologists of the COVID-19 Era

雑誌 International Heart Journal 2021;62(3):465-469.

著者 新保麻衣、中山敦子（東京大学 循環器内科/榊原記念病院 循環器内科）

※論文の日本語版は[こちら](#)からご覧ください。

お問い合わせ先

東京大学医学部附属病院 循環器内科 中山敦子

〒183-8655 東京都文京区本郷 7-3-1

E-Mail: NAKAYAMAA-INT@h.u-tokyo.ac.jp